

第2節

児童の変化

【数年前と比べて、「リーダーシップをとれる児童」「粘り強い思考力のある児童」「落ち着きのある児童」「協調性のある児童」が減ったと3人に2人の教師が感じている。また半数近い教師が「自己表現能力の高い児童」「やる気や自信を持つ児童」が減ったと感じ

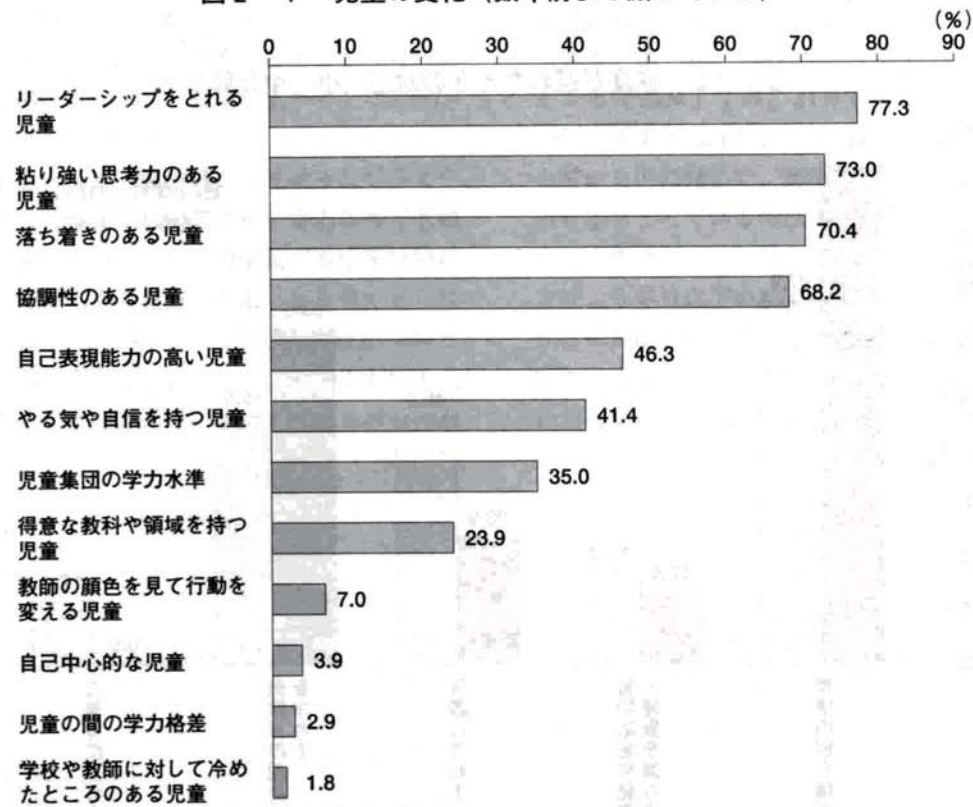
ている。一方、大半の教師が「自己中心的な児童」が、3人に2人の教師が「学校や教師に対して冷めたところのある児童」が増え、「児童の間の学力格差」が大きくなったと感じている。】

Q8. 数年前と比べて、近年の児童はどう変わってきていると思いますか。A～Lのそれぞれについて当てはまる番号に○をつけてください。先生の印象で結構です。

数年前と比べて児童がどのように変わったかについて、いくつかの項目を立ててたずねた。図2-7は、数年前と比べて「減った」

という回答の割合の高かった順に、図2-8は「増えた」という回答の高かった順に項目を並べたものである。

図2-7 児童の変化（数年前より減っている）



注1) サンプル数は1161人。

注2) 数値は「減った」割合（「児童集団の学力水準」は「低くなった」割合、「児童の間の学力格差」は「小さくなった」割合）。

数年前と比べて「減った」と教師が感じている割合の高かった項目は、高いほうから「リーダーシップをとれる児童」(77.3%)、「粘り強い思考力のある児童」(73.0%)、「落ち着きのある児童」(70.4%)、「協調性のある児童」(68.2%)、「自己表現能力の高い児童」(46.3%)、「やる気や自信を持つ児童」(41.4%)、「児童集団の学力水準」(35.0%)となっている。

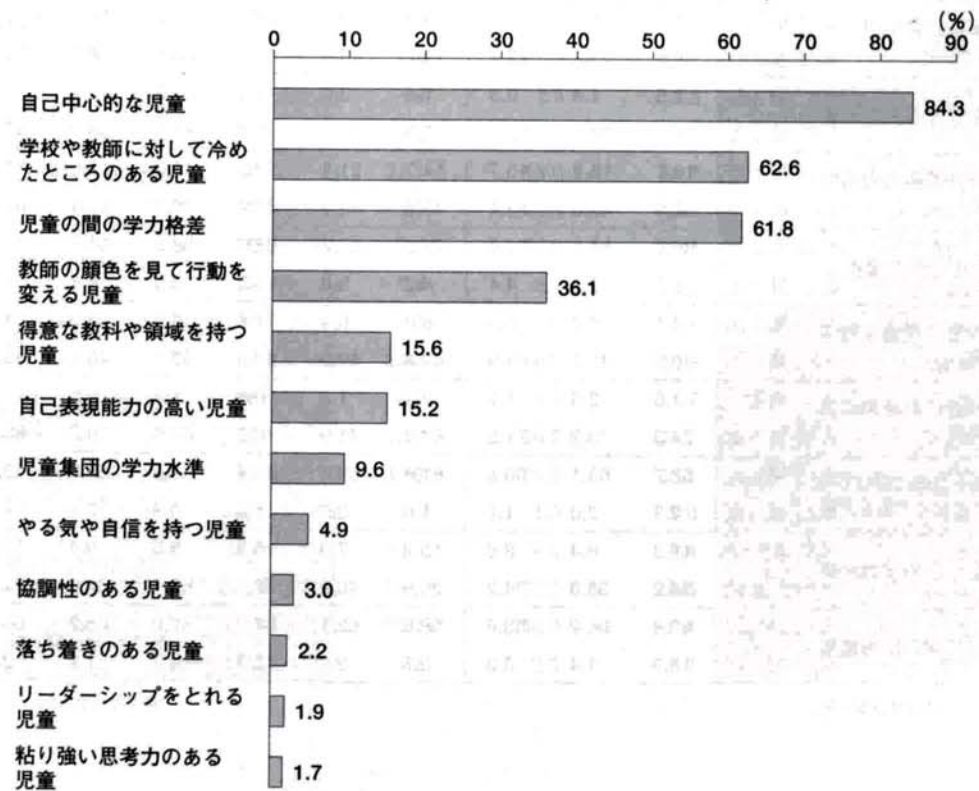
一方、「増えている」と教師が感じている割合が高かった項目は、高いほうから「自己中心的な児童」(84.3%)、「学校や教師に対して冷めたところのある児童」(62.6%)、「児童の間の学力格差」(61.8%)、「教師の顔色を見て行動を変える児童」(36.1%)となっている。

リーダーシップをとれる児童や協調性のある児童が減っている一方で自己中心的な児童

が増えているように、児童同士のまとまりが作れなくなっていること、学校や教師に対して冷めたところのある児童や教師の顔色を見て行動を変える児童が増えているように、学校や教師に対する児童のコミットメントが低下し、したたかな行動をとるようになっていくこと、さらには児童間の学力格差が大きくなっていることなど、生活指導面や授業面など多岐にわたって、実際に学級としてのまとまりが維持できなくなっていると教師が感じている様子がうかがえよう。

次に表2-2より地域別にみてみよう。まず所在地別にみていくと、所在地別に目立った差はそう多くなかったが、以下の諸点がやや目についた。「リーダーシップをとれる児童」が減ったと感じている割合は、都県庁所在地の教師のほうが市部や郡部の教師よりも5ポイント高い。「自己中心的な児童」が増

図2-8 児童の変化（数年前より増えている）



注1) サンプル数は1161人。

注2) 数値は「増えた」割合（「児童集団の学力水準」は「高まった」割合、「児童の間の学力格差」は「大きくなった」割合）。

えたと感じている割合は、郡部よりも、市部、さらに都県庁所在地の教師のほうがやや高い。都市部ほど人間関係が希薄であるということによく言われることであるが、児童にもそのような傾向がみられるようである。興味深い結果となったのは、「児童の間の学力格差」が大きくなったと感じている割合が、都県庁所在地や郡部の教師よりも市部の教師のほう

が数ポイント高かったことだ。これは学校外での学習機会とのかねあいも含めて検討してみる必要がある。

都県別にみていこう。都県別の差は全般に大きくみられ、多くの項目で10ポイント内外の差がみられた。特に大きな差があったものだけを見ていくと、まず「協調性のある児童」が減ったと感じる割合は、ほとんどの都県で

70%前後だったが、熊本県は57.5%とやや低かった。「リーダーシップをとれる児童」が減ったと感じる割合は、東京都と岡山県の教師は85%ほど、福岡県と熊本県では77%ほど、岩手県と新潟県では70%ほど、と都県によってかなりの散らばりがみられた。「自己中心的な児童」が増えたと感じる割合は、新潟県、東京都、岡山県が88%前後と高く、岩手県と

熊本県が78%前後と低かった。「やる気や自信を持つ児童」が減ったと感じる割合は、東京都と熊本県が30%台後半で、その他の県は40%台だった。「粘り強い思考力のある児童」が減ったと感じる割合は、東京都と岡山県が80%前後と高く、その他の県は70%前後、特に岩手県では64.9%と低かった。「児童集団の学力水準」が低くなったと感じている割合

表2-2 児童の変化（地域別）

(%)

		都県庁所在地 (435)	その他の市部 (358)	郡部 (365)	岩手県 (191)	新潟県 (203)	東京都 (184)	岡山県 (226)	福岡県 (181)	熊本県 (174)
協調性のある児童	増えた	2.8	2.8	3.6	3.7	2.5	2.7	4.4	1.7	2.9
	減った	69.7	66.5	68.2	64.4	70.4	69.0	74.3	71.3	57.5
リーダーシップをとれる児童	増えた	1.6	1.7	2.5	1.6	3.4	1.1	0.9	1.7	2.9
	減った	80.5	74.9	75.9	68.6	70.0	84.8	85.0	77.9	77.0
教師の顔色を見て行動を変える児童	増えた	34.7	34.9	38.6	37.7	37.9	35.9	29.6	35.4	41.4
	減った	6.7	6.7	7.4	6.3	8.4	6.5	9.7	4.4	5.2
得意な教科や領域を持つ児童	増えた	15.9	14.8	16.2	16.2	18.7	12.0	17.3	14.9	13.8
	減った	25.5	23.2	22.5	14.7	25.6	26.6	23.9	29.3	23.0
落ち着きのある児童	増えた	2.5	1.4	2.5	1.6	2.0	2.2	1.8	2.2	3.4
	減った	69.2	73.5	68.5	67.0	74.4	71.2	73.5	68.0	67.2
自己表現能力の高い児童	増えた	16.1	15.6	13.7	14.7	21.2	12.5	12.8	12.2	17.2
	減った	49.0	45.0	44.4	43.5	43.3	46.2	50.9	51.4	42.0
自己中心的な児童	増えた	86.7	84.1	81.6	77.0	87.2	88.0	88.9	84.5	78.7
	減った	4.8	2.2	4.4	4.2	3.0	4.3	3.5	4.4	4.0
やる気や自信を持つ児童	増えた	4.1	4.7	6.0	6.8	6.4	1.6	5.3	3.9	5.2
	減った	40.5	41.9	41.9	42.4	40.9	38.0	43.8	46.4	36.2
粘り強い思考力のある児童	増えた	1.6	2.5	1.1	3.1	1.5	0.5	1.3	2.8	1.1
	減った	74.3	73.2	71.2	64.9	71.9	79.9	80.5	70.7	68.4
学校や教師に対して冷めたところのある児童	増えた	63.7	63.1	60.5	61.8	59.6	64.1	61.5	66.3	62.6
	減った	2.3	2.0	1.1	1.6	2.5	1.6	0.9	2.2	2.3
児童集団の学力水準	高まった	11.3	8.4	8.8	15.2	7.9	10.3	3.5	9.4	12.6
	低くなった	35.2	35.8	34.2	20.9	40.9	38.6	60.4	32.6	22.4
児童の間の学力格差	大きくなった	60.9	66.2	58.6	58.6	59.1	66.8	62.8	65.2	58.6
	小さくなった	3.9	1.4	3.3	3.7	3.9	3.3	3.1	1.1	2.3

注) ()内はサンプル数。

表2-3 児童の変化（教職経験年数別）

(%)

		～5年目 (70)	6～10年目 (160)	11～20年目 (598)	21～30年目 (260)	31年目以上 (72)
協調性のある児童	増えた	2.9	5.6	2.0	4.2	1.4
	減った	55.7	56.3	69.7	73.1	76.4
リーダーシップをとれる児童	増えた	2.9	0.0	1.8	2.3	4.2
	減った	62.9	73.8	77.8	81.5	79.2
教師の顔色を見て行動を変える児童	増えた	54.3	38.8	35.5	32.3	30.6
	減った	2.9	5.6	7.2	8.5	6.9
得意な教科や領域を持つ児童	増えた	21.4	13.8	14.4	18.8	12.5
	減った	8.6	21.3	24.2	25.4	34.7
落ち着きのある児童	増えた	1.4	2.5	1.8	2.7	2.8
	減った	47.1	70.6	71.6	70.8	80.6
自己表現能力の高い児童	増えた	17.1	13.8	12.9	19.2	20.8
	減った	45.7	53.1	48.0	39.2	43.1
自己中心的な児童	増えた	77.1	80.0	85.3	86.2	86.1
	減った	1.4	3.1	3.5	5.8	4.2
やる気や自信を持つ児童	増えた	2.9	5.6	4.7	6.2	2.8
	減った	34.3	36.9	40.8	44.2	52.8
粘り強い思考力のある児童	増えた	2.9	1.9	1.7	1.5	1.4
	減った	60.0	66.9	71.7	79.6	84.7
学校や教師に対して冷めたところのある児童	増えた	48.6	56.3	65.1	62.3	70.8
	減った	1.4	1.3	2.0	1.9	1.4
児童集団の学力水準	高まった	18.6	9.4	9.4	7.7	9.7
	低くなった	12.9	35.6	33.6	41.2	44.4
児童の間の学力格差	大きくなった	55.7	56.9	59.4	71.5	63.9
	小さくなった	4.3	2.5	2.8	2.3	5.6

注) ()内はサンプル数。

は、岡山県が60.4%と半数強の教師がそう感じている一方、岩手県では20.9%、熊本県では22.4%と、都県間でもっとも顕著な差がみられた。「児童の間の学力格差」が大きくなったと感じている割合は、都県間の差は大きくないものの、東京都、岡山県、福岡県が60%台で、岩手県、新潟県、熊本県は50%台と分かれた点はやや興味深い。

最後に、表2-3より教職経験年数別にみてもみよう。「減った」と感じる割合が高かった項目、「増えた」と感じる割合が高かった項目、いずれもほとんどの項目で、5年目以

下の教員から31年目以上の教員へと、教職経験年数が長くなるほど、そう感じる割合が10ポイントないし20ポイント高くなっている。しかし、「教師の顔色を見て行動を変える児童」が増えたと感じる割合は、まったく反対で、若手教師ほどそう感じている割合が高かったのは、興味深い結果だった。教師の顔色を見る児童はいつの時代にもいて、自己中心的な児童や協調性のない児童、学校や教師に対して冷めたところのある児童といった近年の特徴とは異なる特徴ということなのかもしれない。